

二〇一七年度卒業終業礼拝

立教英國學院通信

第一七八号 二〇一八年三月十日
発行者 立教英國學院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikyo.co.uk>



－目次－

	ページ		ページ
2017 年度卒業終業礼拝	1、3~5	新春かるた大会 合唱コンクール	6
2017 年度第 3 学期 行事	2	立教英國学院での日常生活	7
2017 年度卒業終業礼拝 祝辞	3	3 学期アウティング	8~9
2017 年度卒業終業礼拝 Graduation Speech	4~5	創立 45 周年 写真で見る立教英國学院のあゆみ 後編	10~11
2017 年度卒業終業礼拝 アンバサダー賞	5	第 6 回 チャプレンより	12

2017 年度第 3 学期 行事

January

6 日 児童・生徒帰寮日

7 日 3 学期始業式

8 日 高等部実力テスト



14 日 大学センター入学試験〈英語〉全校で挑戦



February

1 日 女子バレー・ボール部 Burgess Hill 戰

1 日 男子バスケットボール部 Michael Hall 戰

3 日 男女バレー・ボール部 Epsom College 戰

3・4 日 Chichester Music Festival

4 日 漢字書き取りコンクール

4 日 バドミントン部 Mid Sussex Tournament 戰

6 日 剣道部 Crawley の道場と合同練習

8-10 日 Worthing Music Festival

18 日 英語検定二次試験

21~26 日 期末考査

27~28 日 期末考査返却



March

3 日 2017 年度卒業終業式

3~10 日 ホームステイ（希望者）

3~10 日 Millais School 短期交換留学（希望者）
Forest School 短期交換留学（希望者）

5~9 日 高等部二年春期特別補習（希望者）



祝 辞

在英國日本大使館公使・總領事
宇山 秀樹



学院で身につけてきたことと信じています。

皆さん将来に大きな期待を込めて、今後心がけてもらいたいことを3つ申し上げたいと思います。

1つ目は、「自分の頭で考える」ということです。そんなこと当たり前じやないかと思われるかもしれませんが、様々な情報の溢れる現代社会では、目に入った情報を受け身で無批判に受け入れがちです。インターネツトやスマホはとても便利ですが、ソーシャルメディアなどネット空間には偽情報や根拠の不確かな情報も飛び交っています。そういう中で、幅広い教養を身につけながら、疑問を持つたり批判的に考えたりすることを意識的に行って、自分の頭で考え、何が真実・事実なのかを見抜くことのできる目を養うことがとても重要です。そのためには、好奇心を広く持つて、文学でも歴史書でも、良い本を沢山読むこと、それから、できれば傾向の違う複数の新聞を読むことをお勧めします。1つの情報を見習うことは誰にでも可能ですが、私も、若

小学部6年生・中学部3年生・高等部3年生の皆さん、本日はご卒業誠におめでとうございます。普段離れていてもお子様を温かく支えてこられた保護者の皆様、手厚い指導で子供達を卒業まで導いてこられた先生方、その他関係者の方々にも、心からお祝いを申し上げます。

卒業生の皆さんには、ご家族から離れた全寮制の生活に慣れるまでは寂しい思いもし、いろいろ苦労をしたことでしょう。でも、英國の美しい田園風景に囲まれたこの広大なキャンパス、素晴らしい環境の中で、大家族のような寮生活を送りながら、厳しくものびのびとした教育を受けて、たぶん、ご家族も驚くほどたくましく成長したのではないかと思います。

今日卒業していく皆さん、立教英國学院で学び、身につけてきたことを基礎として、グローバルな視点を持つて、国際社会の中で日本の未来を担っていく人材となることを期待しています。こんなことを言うと、荷が重いと思うかもしれません、皆さんは、そのための素養をここ立教英國

よね。羽生選手は去年11月練習中に右足首に大きなかがをして、オリンピックの直前までジャンプの練習もできないような大ピンチに陥りました。「スケートができなくなるんじやないか」と思う日々が続いた」そうです。しかし、本番では痛み止めを飲みながら素晴らしい演技をして、見事金メダルを獲得しました。金メダルが決まり直後に、彼は、「自分に勝った」と言いました。けがに苦しみながら地道な努力を重ねて、自分との戦いに勝ったのです。もちろん羽生選手のような超人的な能力は並みの人間に相似できるものではありませんが、何があつても負けない精神力を身につけながら、誰にでも可能です。私も、若い頃大学受験に失敗したり、外務省に入るための試験に2度落ちたりしましたし、社会人になってからも失敗して「こむことや難しい状況に直面することがしょっちゅうあります。そのためには、好奇心を広く持つて、自分の人生、楽しいことや成功することばかりではなく、壁にぶつかって悩むこと、失敗することもいろいろあるでしょう。でも、自分でチャレンジすること」です。これから人生の道に進んでも必ず役に立つはずです。

2つ目に、「失敗を恐れず、あきらめないでチャレンジすること」です。これから人生の道に進んでも必ず役に立つはずです。自分は「自分はできる」と信じてチャレンジしていく精神的な強さを是非身につけていくください。

3つ目に、「日本人としてのアイデンティティと誇りを持ちながら、異なる文化や価値観を理解し尊重すること」です。最近、世界のいろいろな国で自己ファースト、自分の国さえ良ければいいという考え方があるがっていますが、そのような風潮は他の国や民族に対する偏見や排除に結びついて、争いの元になりかねません。多様性を大事にする寛容な心を持つことが、益々重要なことになっていると考えます。皆さんは、立教英國学院で学ぶ中で、ローカルコミュニティとの様々な交流、ホームステイ、短期交換留学等を通じて、英國の文化や習慣、英國人の考え方、特に、多様性を大切に思っています。同時に、日本の優れた点、世界に

誇れる美点を再発見することもあったたのではないかと思います。それは、日本国内ではなかなかできない貴重な経験です。皆さん、その貴重な経験に基づいて、これから、日本の良いところ、優れた面を理解し発信しつつ、異文化や異なる価値観を尊重できる国際人に成長していくことを願っています。

最後に、皆さん立教英國学院で得たかけがえのない経験を活かしながら、将来、日本と英国の架け橋として、また、世界に通用する国際人として大きく羽ばたいていくよう心からお祈りして、私からの祝辞とさせていただきます。

* 卒業のお祝い * お昼のランチョンにて



Graduation Speech

小学部六年 玉越 麟之介

立教英國学院に入って来た時のことや来学期ここにいない小学五年生の友達の第一印象は、正直、一年間の中で強く印象に残ることが多すぎて覚えていません。入学してから起こった色々な出来事からたくさんの方を学びました。

入学式の翌日小学部初のケンカがありました。その後もケンカは毎日のように続き、いつのまにかケンカは日課と化していました。一年間でしたケンカの数は、たぶん立教英国一多いです。

休み時間にはみんなで大縛をしました。ここでケンカが無かったかどうかは聞かないでください。最初はクラス9人で連続8の字跳びさえも出来ませんでした。でも、今では時間さえあれば300回位までは跳べるようになっています。

オープンデイの一週間後には「セント・ダービー＆ジョアンクラブ」というクランレイのコミュニティーセンターへ出し物をするために外出しました。発表のために一週間恋ダンスをクラス皆で練習しました。その後のアウティングのバスの中では、毎回？みんなで踊りました。しつこいようですが外出先やバスの中でケンカがなかったかは聞かないでください。

ケンカが日課だったぼく達が三学期に成長を見せます。かるた大会、ここでぼく達小学部は3位でした。結果を見て、悔しがっている人もいましたが、僕的には満足です。小学部がかるた大会において3位以内に入ったのは初めてだと聞きました。放課後やホームルーム時間の多くのかるた大会のため費やし、みんなで協力してチームワークを高めました。

小学部の解散が近付いてきました。席替えや授業、外出など、色々な事に「最後の」がつくようになりました。そして、小学生最後の「皿並べ」、10分を切るというクラスの目標を達成するためみんなで作戦を練りました。1年間で見つけてきた色々なコツ、1年間で得た団結力、これらを利用して最後まであきらめずに頑張りました。結果は8分39秒。この結果には大きな達成感を感じました。

この1年間、失敗もケンカもしました。でも、失敗をしたことによって、それを次のふみ台にすることことができたし、ケンカすることによって、逆に相手への思いやりや人と違って当然だということを覚えました。

この立教英國学院では、普通の小学校や中学校では学ぶことのない「価値のあるもの」を学ぶことができます。そんなセリフ、もう聞きあきたと思う人がいるかもしれません。でも、小学5年生まで普通の小学校に通っていた僕にはわかります。家族とは違う、全く違う考えをもった人と暮らしていくということは、したくともできない人たちがたくさんいます。こういう経験は、将来とても役立つと思うので、僕は中学校もここにいます。中学校に入るとやることが一気に増えます。どんどん勉強が難しくなっていき、期末試験もあります。自習をしなければならないことも増えていくでしょう。

時にはつまずくかもしれません。でも頑張ります。何度も立ち上がって見せます。甘えることがあるかもしれません。いや、甘えます。ぼくは絶対誰かに甘えます。でも、困っている人がいたら今度は僕が助けます。

△セーブ1年間をいぶしへぎやかに△小学部△トコノナハシ△セーブ



中学部三年 石川 ゆほ

その知らせを聞くまでは、いつもと変わらない日常だった。二年前の夏、私はラクロス部の部活を終え、自宅に戻った。母から、父の転勤でイギリスに行くことを伝えられた。イギリスに行くのは初めてではないから、興奮はしなかつたが、“寮生活”と聞いて緊張し始めてしまった。

私はここ、立教英國学院に中二の二学期に編入した。二学期にはオープンデイという立教にとっての一大イベントがあり、一週間のブレイクを使った準備期間まであった。私は二学期から編入したことをとても後悔していた。それは、何をわからぬ私が皆の足を引っ張ってしまうと思ったからだ。その予感は的中して私は何をどうすればいいのかわからず、みんなにただ頼っているだけだった。ロボットのように言われるがまま仕事をこなす私に元メンと言われる立教に長く在籍している皆は指示を出してくれた。動かされていただけで達成感どころか、物足りなさまで感じていた。だから私はこのオープンデイの経験を生かして来年は私が新入生を引っ張って行こうと思った。

三学期に突入すると、合唱コンクールがあった。クラスの行事なら少しははじめると思っていたが、結局馴染めないままだった。

中三の一学期。新入生が入り、クラスメイトが二倍の11人から22人にまで増えた。そして私は吉岡さんと一緒に学級委員をやることになった。これもまた立教の伝統的な行事であるが、四月の下旬頃に球技大会がある。私も初めてなのでとても楽しみにしていた。でも、やりたかったリレーや障害物競走がないと聞いて少し悲しかったが、球技大会では先輩や後輩と仲良くなるきっかけとなった。

そして二学期、二学期といえば、やはりオープンデイ。それは私がここにきて一年が経ったことを感じさせる響きだった。しかし去年と違うこと、私がM3の学級委員なのである。学級委員にとって一年の大行事といえるオープンデイは決して順調に進まなかつた。まず、同じ学級委員の吉岡さんが遅れて帰ってきたのもその一つだ。クラスを私一人でまとめるのはとても大変で心細かった。でも、元メンを中心には色々と助けてくれことは今でも覚えている。とてもうれしかった。ありがとう。吉岡さんが帰ってくると今度は立教生活が長い彼女に助けられたり、何より心強かった。準備期間に入る前から積極的に放課後を使って裏紙貼りをやってくれたおかげで、早く先へ進むことができた。それは、裏紙を作りすぎて余ってしまうほどだ。これらはみんなが努力してくれた証であり、私はとても嬉しかった。同時にそれは昨年のそれとは違った準備期間を予期させるようで準備期間が待ち遠しかった。

どうとう準備期間だ。クラスのみんなそれぞれが自分の仕事に没頭していた。それによって本番前日には多学年と比べて早く就寝することができるほどの完成度だった。オープンデイ当日はあつという間に過ぎ去り、後夜祭と結果発表がされた。模型部門では3位、背景部門ではなんと！1位を獲得し、想像以上の成績を残せた。それはみんなの努力の結晶であり、私は結果に表れたことを嬉しく思った。

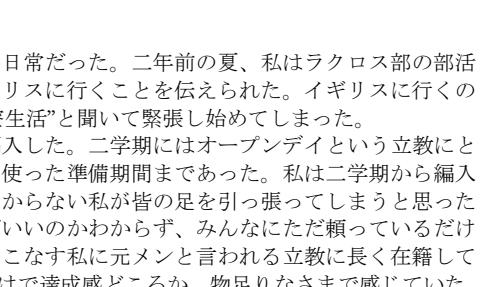
私はこのオープンデイを通してクラスメイトと一緒に仕事することが何より楽しかった。去年の私には想像できないほど充実したオープンデイだった。

中学最後の三学期。もう高校生になることに私の心は悲しみと喜びで混ざり合っていた。そしてこのクラスでやれる最後の行事、合唱コンクール。それなのに、皆やる気がなくただ文句を言いまくり最後の最後までもめ続けた。でもそれは、みんながそれぞれクラスに対する思いが擦れ違ってもめ事が起こっただけだと思う。なぜなら、行事が終わるたびにみんなの絆が深まっていくことを感じられていたからである。

このような貴重な体験ができたのは、違いなく家族の支えがあったからだ。最初は大変だった寮生活もいつの間にか苦にならなくなつた。もし立教に編入していなければ、私は思い出もありなく、普通に平凡な中学校生活を過ごしていただけだろう。

最後にM3のクラスメイトへ。行事に対して意外と熱血な所があり、一人がやり始めると皆も一緒にやり始める。こんなM3の23名は、今日ここ立教を卒業します。別の学校に行く人もいるけれど、お別れだとは思わない。ただ単に関係性が変わるだけです。私たちが作ってきたこの三年間は、私たちだけの大切な思い出だ。みんなに会えたこと、みんなと過ごせたことに感謝している。

本当にありがとう。



高等部三年 新名 莉果

2月の初め、卒業式でのスピーチを頼まれて、私は2ヶ月前までの立教生活を振り返った。

卒業スピーチというと、堅苦しく学校生活で得た何か特別なもの話をするべきなのかな、と思ったのだが、考えても考えてもどうしようもなく小さな、毎日ちよつとしたことしか思い出せない。携帯もない、電波もない、生活の中にはいつだって「先生」がいる。でもそんな窮屈な生活の中でも、歯を磨く時、洗濯物を畳む時、就寝前、時には就寝後、その何分かに起こる本当にちよつとしたこと。それが実は異常なくらいに楽しかったりしたのだ。もしかすると、その“ちよつとしたこと”こそが、私の中で特別なものになっているということかもしれない。

きっとここにいる人の中には、この立教という環境に不満を感じている人が少なからずいるだろう。こんな事を言ったら先生に怒られるかもしれないが、卒業スピーチだからといってこれまでの三年間を美化して話すつもりはない。私もこの3年間、不便で、面倒で、時に不条理なこの生活に不満を感じ、嫌気がさす事が何度もあったから。

でもこんな三年間の日常は、ある日突然思い出へと変えられ、そんな思い出も少しずつ思い出せないものになっていく。ずっと続していくかのように思っていたことが、いつしか思い出からも消えていってしまう、それがなんとも悲しい。終わりが見えなくてうんざりしていても、終わりが来てしまうとなぜだか寂しく悲しいものだ。

今はそんな風に思っている私も、休み明けは学校に向かうコーチの中で、帰りたくないという心の叫びをいつも咬み殺していた。

しかしふとを考えると私達は学校に向かっていても、なぜか「行く」ではなく、自然に「帰る」とか「戻る」と言ってしまう。立教は、いつからか私達の帰る場所になっていた。

だからきっと、私の感じる悲しみは帰る場所がなくなってしまうといった感じなのだろう。

「置かれた場所で咲きなさい」という本がある。そしてその題名は私が好きな言葉の一つだ。その本の一説にはこう書いてある。

「こんなはずじゃなかった」と思う事があっても、その中で咲く努力をして欲しいのです。

でも、どうしても咲けない時があります。

雨風が強い日、日照り続きで咲けない日、そんな時には無理に咲かなくても良いのです。

その代わり、根を下へ下へと降ろして、根を張るのです。

次に咲く花がより大きく、美しいものとなるために。

これはまさに、立教という逆境で生活した事が私達の自信に繋がり、何よりも私達を強く立派に成長させてくれていたという事だ。私自身、もし立教で生活していなければ、ここまで将来の可能性を広げることも、その可能性の先に見える壁に立ち向かうこともできなかつたと思う。

そして、そこに立ち向かう私の背中を強く押してくれたのは、いま目の前にいる立教で出会った君達なのだ。

置かれた場所で咲いた果て、さらに広がる37色の未来に向けて、今、ここを卒業する。

今までありがとう。またいつか。



Ambassador Award

アンバサダー賞は、1年を通して国際交流に貢献のあった児童・生徒へ、地元 Horsham 地区の市長さんから贈られます。

Councillor Peter Burgess - Speech on Graduation Day - 3 March 2018

Head master, Staff, Students, Ladies and Gentlemen. Thank you for inviting me to your graduation.

Language is most important as we can then communicate and understand other people and races.

Mrs Hunter has just referred to the success of your concert at the end of last year. I was there and enjoyed it very much.

One of the things the English do is to make fun of themselves. When you realise this, you will fully understand our way of life.

One of the highlights of the concert was what is called the "first half closer". Here three senior girls, beautifully dressed, gave us a rendering of "Three Little Girls" from the Mikado. They did it with gestures, humour and panache, in a very funny and successful act.

I am here to present the Ambassadors Cup to Miss Tomoko Matsunaga. This is for the student who has made a significant contribution to improving relations between Japan and the UK.

She took part in the UK/JAPAN Young Scientist Workshop at Cambridge last summer, as well as the UCL-Japan Young Challenge, where she played a significant role in assisting communication between students due to her excellent English.

It gives me great pleasure to present her with this cup and to wish her, and all of you immense success in your futures.



新春かるた大会

1月20日（土）は2018年を迎えて、新年らしくかるた大会が行われました。この行事は、かつて中二と高一の国語の授業で行われていた対戦が全校行事になったものです。



「百首も覚えられない…」「歌の意味も分からぬ」と弱音を吐きながらも、「天つ風は?」「おとめ!」「大江山の文」「田子の浦の富士」などと小学生から高校生まで、頑張って和歌を覚え、練習も重ねて本番に臨みました。



いざかるた大会が始まると、みな真剣に下の句の取り札を見つめます。上の句のうちに下の句が分かっても、札の場所を見つけなければとれない…サッとあちこちに視線を走らせ、ぱっと取る。クラスメイトが札を取ると歓声があがったり、声援が送られたりし、熱く対戦が繰り広げられました。個人獲得枚数、クラス別獲得枚数いずれでも小中学生が大健闘でした。

♦個人別獲得枚数（個人名は伏せています）♦

第一位 高一女子（18枚） 第二位 高二女子（16枚）

第三位 中三男子（15枚）

♦クラス別平均獲得枚数♦

第一位 中三 6.4枚

第二位 中二 6.3枚

第三位 小五・六 5.7枚

合唱コンクール



今年も生徒会主催で合唱コンクールが行われました。フルートやクラシックギターを使って、シンプルに、けれども少し気をきかせた工夫を加えて、どのクラスも歌声と共に、笑顔で元気よくうたいあげました。



立教英國学院での日常生活

立教英國学院では、寮生活の日常の中に、他の学校で経験しないようなことが数多くあります。今号では、その中から3つの事柄を取り上げて紹介します。



① 盤並べ

立教生活の中で重きを置かれている食事。朝食で使用する食器やカトラリーを並べることは児童・生徒たちの大切な仕事です。



夜のブレイクが終わる直前になると「盤並べ」の担当にあたっているクラスの児童・生徒たちがニューホール(食堂)に集まります。ナイフ、フォーク、スプーン、ボウル、プレートと翌朝の食事に必要な一式をそれぞれ並べ、必要なものが全てそろっているかを確認したらその日の「盤並べ」は終了です。「盤並べ」を通じて自分たちの使う食器への理解が深まる同時に、食事に対する意識も高まります。



② タオル下げ

シャワー室でタオルを使用した後、備え付けのバスケットに入るのは一人ひとりの役割ですが、そのバスケットは各ドミトリーや当番制で洗濯場所まで運びます。寮生活を円滑に営むためには、各人がそれぞれの責任を果たし、お互いに協力し合う必要があります。タオル下げは日々のささいな仕事ですが、このような仕事の積み重ねの上に、気持ちのよい集団生活があるのです。



③ トランク上げ／トランク下ろし

長期休みを終え、スーツケースを携えて戻ってきた児童・生徒たちは、まずはスーツケースの荷物を取り出し、寮と教室の整理を行います。その後、日直の先生の指示に従って、空になったスーツケースを一斉に屋根裏部屋へ運びます。新学期の始まりの「トランク上げ」は、休暇から学校生活への気持ちの切り替えへつながっています。



各学期の終わりになると、終業式の前日にはスーツケースを屋根裏から下ろして帰宅のためのパッキング。学期の終わりの開放感も加わり、「トランク下ろし」はにぎやかな雰囲気に包まれます。在英の全寮制学校である立教英國学院ならではの小さな行事とも言えるでしょう。



三学期アウティング



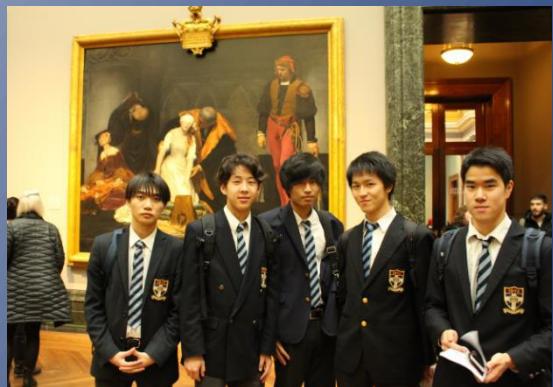
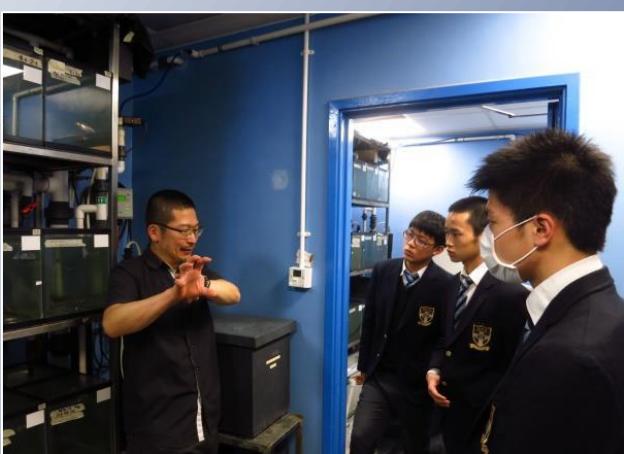
小5・6 Air Hop & ODEON cinema



中1・2 Science Museum



中3 Science Museum & Musical "Annie"

高1 Victoria & Albert Museum,
& Musical "Kinky Boots"

高2 UCL* Yamamoto Laboratory (進化発生学)、National Gallery (Churchill War Rooms 停電につき急遽変更)

*University College London

& Musical "Les Misérables"

止まらない進化

中学部二年 野口 紘子

あつという間に六十年がすぎておばあちゃんになつたら、今の私の世界は博物館に展示されているのだろうか。

サイエンス・ミュージアム。今回のアウティングで行つた場所だ。宇宙や、数学、エネルギー、時計、車などの物が展示されていた。VRで宇宙生活をのぞいたりすることもできた。飛行による体験や科学実験、IMA Xや宇宙の映像を見る 것도できる。ここにはたくさんの展示物もあり、歴史を感じることもできた。

-1 (地下一) 階。このサイエンス・ミュージアムは日本でいう四階まであり、どう



First automatic door in UK

の階もすごく豪華だった。しかし、この一階は他の階と違い、少しひつそりした感じだった。他の階とは別の雰囲気をかもし出していた。そこで私が見たものは昔の電化製品だ。

六十年ほど前の電化製品、と聞いて何を想像するだろう。ラジオ、冷蔵庫、キッチン、ドライヤー、トイレ、自動扉、ゲーム機器。例えば、冷蔵庫。今は電気によって自動で動いているが、私がみた冷蔵庫は手動式だった。レバーをまわして温度を下げる。簡単にいく訳もなく、冷やすまでにものすごく時間がかかる。自動扉。今の、自動扉と見た目には大して変わらないが、いきなり開くのは最初は驚いた。昔の人も、私がみたいに驚いていたのだろう。

ゲーム機器。私が体験したのは結構難しく、最初はてこずつたが、慣れると楽しくなってきた。今となつては当たり前のゲームも、全部白黒のでかい機器から始まっているのだと思うと、この六十年ほどの間に遂げた進化がすごいものなのだと、いう事がわかつた。

私の、おばあちゃん世代は今この時代に生まれてくることが山あつて大変だったんだろうな、何回もある。では、私がおばあちゃんになつたら、自分の孫世代にも同じような事を思われているのだろうか。この六十年の間にとげたスピードは、ものすごくめざましいものだったから、これから進化も速さを増していくんだろうな、と思った事はどんどん進化していくのだろう。今回のオープンデイで、テクノロジーについて私達は展示しました。

館内を回る中で私はやはり日本のゾーンに心惹かれた。そこには日本の美しい着物や能面、漆塗の重箱などの伝統品が飾られている。なんだか誇らしく感じた。特に、漆塗りの花柄の重箱は黒の艶やかな下地に赤い花が描かれていて鮮やかで、可愛らしかった。

美術館を楽しんだあとには、『キンキー

高一最後のアウティングは、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館(V&A)とミュージカルの一本立てだった。

V&Aでは、様々な国ごとの特徴的な陶器、家具、彫刻などが置かれており、見応えがあった。例えば、イギリスのものとしてはポピー・アピールのポピーの花や、アジアの各国からイギリスに伝わった調度類などだ。



Victoria & Albert Museum にて



イントロダクションで紹介した『100年前の人々が予想した、100年後の未来図』

中2生がオープンデイで取り上げた
「常識を変えるテクノロジー」



『これから未来に期待されるテクノロジー』

ブーツ』というミュージカルを観た。主人公は靴屋の跡取りであるチャーリー。破綻寸前の工場を立て直すために、ドラッグクイーンのためのブーツを作り、見本市に出して再起を図るという物語だ。友情の大切さが伝わってくるストーリーには胸を打たれた。チャーリーは、一度は工場の復活をあきらめるが、ローラという友人のおかげで最終的に成功をおさめることができた。最後の曲“Raise You UP”。繰り返して歌われる“Let me raise you up”というフレーズは、「あなたがどんな苦境にあろうとも、私が傍にいて励ます」というようなニュアンスを含む。傍で支えてくれる友人の存在は大きなものだと強く感じた。

また、このミュージカルでは男性が高いヒールのブーツを履いて踊つており、そのダンスは圧巻だった。温かな友情だけでなく、ユーモアもあり、歌もあり、ダンスもあり、印象的で思い出に残る作品となつた。高校一年生最後のアウティングだと思ったが、とても良いアウティングだと思った、と思う。

高校一年生最後のアウティングだと思ったが、とても良いアウティングだと思った。しかし、貴重な体験ができた何よりも心から楽しむことができたので、とても良いアウティングだと思った、と思う。

創立四十五周年

写真で見る

立教英國学院のあゆみ

後編

※全三編の最終回です

二〇一七年度の今年、立教英國学院は、創立四十五周年を迎えました。一九七二年に海外の日本人学校として開校した本校は、たくさんの方に支えられて今日の日を迎えてます。十一月十一日には創立四十五周年を祝う、記念コンサートを行いました。

四十五年の間に少しずつ変化が訪れます。前編・中編では、二〇〇六年に当時の中学部一年生がオープンデイで行つた展示企画の資料を基にしながら、立教英國学院の一九七〇年代から九〇年頃までを写真で振り返ってきました。

最終回の後編では、二〇〇〇年以降の変化と共に、現在の立教英國学院の様子を紹介します。

2002年



31番教室が、フロア張りの剣道場に改装。

2006年



根が建物を傷めるため、本館脇の木を切り倒す。

2007年



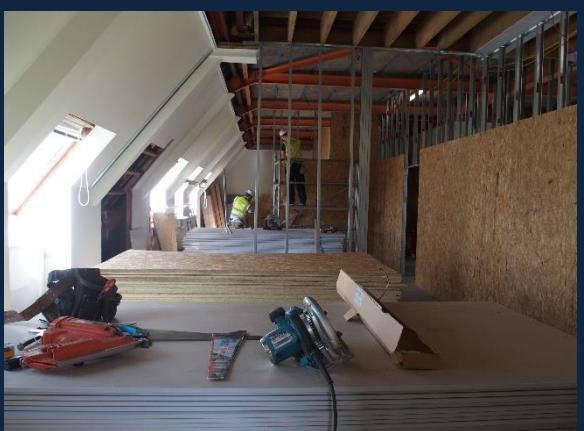
ウサギの巣穴が多く、ボールが止まってしまっていたテニスコート向こうのフィールドを Soccer Field に整備。

2011年



英国の学校での Senior Students の習慣に倣い、高3生は寮で Tea と軽食がとれる習慣がスタート。

2014年



新館三階を改装し、区分して5つのドミトリーや完成。

2015年



新女子寮として Garden House が完成。

2009年

新行事“かるた大会”が始まる。

2010年

高等部実力テスト
高2春期&高3夏期補習がスタート

2012年

生徒会主催で新行事“合唱コンクール”開始。

2013年

夜の自習が図書館で可能に。



2016年～



各寮に少しずつ Study Room（自習室）が設けられ、今も整備が続いています。



チャプレンより

第6回



與賀田チャプレンは立教英國学院の学校付き牧師さまであります。礼拝や聖書の授業ではさまざまなお話をしてください。

日本と比べてイギリスの緯度は高い位置にあります。そのため、イギリスの冬は長く、そして暗い時間が一日の大半を占めます。夕方四時くらいになると、もう真っ暗となります。

冬至は昨年ですと十二月二十一日ですから、クリスマス（十一月二十五日）はまさに暗闇の中で行われます。クリスマスはイエス様のお誕生を祝う日ですが、それが暗闇の中で行われることは実に象徴的です。

イエス様は若く貧しい夫婦のもとに生まれになりました。その誕生は決して恵まれたものではありませんでした。時の権力者に庶民達は翻弄され、身重だった妻マリアと共に夫ヨセフは旅にでなくてはなりませんでした。出産前夜、しかし宿屋はどこも満員で、彼らはやつとのことで馬小屋を借り、そこでイエス様が生まれになつたのです。

赤ちゃんというものは実際に弱く、人間の愛なしに生きることはできません。赤ちゃんの存在は、私達に「愛する」といふことを教えてくれます。と、同時に、その弱い赤ちゃんの「温もり」は、強い立場である大人の私達に、「愛」というものを伝えてくれるもので

す。

日本と比べてイギリスの緯度は高い位置にあります。そのため、イギリスの冬は長く、そして暗い時間が一日の大半を占めます。夕方四時くらいになると、もう真っ暗となります。

冬至は昨年ですと十二月二十一日ですから、クリスマス（十一月二十五日）はまさに暗闇の中で行われます。クリスマスはイエス様のお誕生を祝う日ですが、それが暗闇の中で行われることは実に象徴的です。

イエス様は若く貧しい夫婦のもとに生まれになりました。その誕生は決して恵まれたものではありませんでした。時の権力者に庶民達は翻弄され、身重だった妻マリアと共に夫ヨセフは旅にでなくてはなりませんでした。出産前夜、しかし宿屋はどこも満員で、彼らはやつとのことで馬小屋を借り、そこでイエス様が生まれになつたのです。

赤ちゃんというものは実際に弱く、人間の愛なしに生きることはできません。赤ちゃんの存在は、私達に「愛する」といふことを教えてくれます。と、同時に、その弱い赤ちゃんの「温もり」は、強い立場である大人の私達に、「愛」というものを伝えてくれるもので

す。

イギリスではどんどん日が長くなり、太陽の眩しさと温もり、また春の花々や冬眠から目覚めたリスやウサギなどの動物が、命の豊かさを感じさせます。今年の春分の日は三月二十一日ですから、イースター（主イエスが十字架にて死に、復活されたことを記念する日）は四月一日となっています。イースターは春分の日の後の最初の満月の次の日曜日ですから、毎年移動する祝日です。ちなみにイギリスの現地の学校では春休みと言わずにイースターホリデーと言いまして、毎年その春休みの期間が変動します。それはイースターに合わせて社会が動いているからです。生活の暦においてもイギリスがキリスト教国であることを実感する時期です。

イースターがこの春にあるのもまた象徴的です。

復活日（イースター）の朝、主イエスは自分を裏切った人たちのもとへ再び来られました。十字架から逃げ出したイエス様の弟子達は、自分のしたことから目を背けるために、家の戸に鍵をかけていました。

「そこに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになつた」（ヨハネによる福音書第二十章十九～二十節）のです。

その傷ついた手で主イエスは弟子達に触れられます。彼らに「温もり」が伝わります。赦しの意味が、愛の光が、彼らの暗闇の世界に再び灯るのです。

愛の光は常に私達と共にあります。たとえ私達がどんな暗闇の中にあつたとしても、私達の手には「温もり」が与えられています。春の日差しの中、私達に歩まれることを祈り願う次第です。イースターおめでとうございます。

2018年立教英國学院同窓会のお知らせ

今年は例年より1週間早い3月18日の開催となります。会場は例年通り立教大学第1食堂です。立教英國学院から佐藤校長、奥野教諭が参加します。また英語の福山一明先生、社会の添田保彦先生（1976～2012勤務）、浦山均先生、棟近先生がご出席下さいます。お誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。皆様にお会いできることを楽しみにしております。

以下のサイトから出欠のご連絡可能です。
<https://goo.gl/forms/CPi3IBZf3pD4Y1rq1>

案内の届いていない方は下記のアドレスにご連絡下さい。
rikkyoeikoku-doso@triton.ocn.jp

Farewell...

3月を以って、Mr Standing(Gardener)、Mrs Banks(Surgery, Night Duty & Kitchen)、齊藤教諭（保健体育）、斎藤教諭（国語）、梅津教諭（社会）が退任されます。特にMr Standingは立教英國学院創立期から“庭師のピーターさん”と親しまれ、全ての立教生にとって思い出深い方でしょう。44年の長きにわたって、すばらしい自然環境を整えて下さいました。

退任なさる皆さんに心からの感謝を捧げたいと思います。今まで大変お世話になりました。

